

【日本】
彼らとわたしたちの
曖昧な境界

及川 茜

近年の日本映画では、地域社会に後から入ってきた人々をどう受け入れるかというテーマをめぐり、特に外国人労働者や移民を描いた作品が際立っている。そこではコミュニティに後から参入した人々の生活が映し出されるというよりは、彼らの存在を通して日本の地域社会の中で周辺化されていた人々に強く光が当てられている。

不透明な他者を『歓待』する

墨田区を舞台にした深田晃司監督『歓待』（二〇一〇）

の主人公夫婦は、下町で小さな印刷所を営んでいる。夫は子連れの再婚で、年の離れた妻とのなれそめは、娘の家庭教師として来てもらったことらしい。これに、離婚して実家に戻ってまだ日の浅い夫の妹を加えた四人の家族で、一見したところ一家は慎ましくも穏やかな生活を送っている。そこにある日、夫の知人を名乗る加川という男が訪ねて来たことをきっかけに、家族の結びや秘密が次々にあらわにされる。

若い妻は地元の出身ではない上、後から家族に加わったため、家庭にも地域社会にも馴染みきれず居心地の悪い場面を経験している。夫と前妻の間に生まれた娘が彼女を「お母さん」ではなく「先生」と呼ぶことに表れているように、彼女は娘に英語を教えることで家庭内での自分の居場所を確保しているようにすら見える。それは地域社会においても同様で、誘われても町内会の集まりにはなかなか足が向かない。夫の妹が、「みんな出戻りの話を聞きたいんでしょ」と言いながらも嬉々として町内会の活動に参加するのは対照的だ。町内会では、外国人による犯罪が増えているとの理由で夜廻りが行われたり、河原にバラックを建てて住み着いているホームレスを排除すべく美化運動を自治体に要請したりしている。この善意の顔をした排他性の中で、妻は自分がいつでも排除される側に転落しうるといふ微かな不安に脅かされている。というのも、彼女に

は前科者の異母兄の存在という秘密があるからだ。家族に知られる怖さから、しばしば訪ねて来ては金をせびる兄に、印刷所の経理をごまかしまでして言われるままに金を渡している。



写真 『歓待』より

しかし、そうした生活に闖入してきた加川は、「わたしたち」と「彼ら」の境界を崩してゆく。妻の異母兄と直談判してたかりをやめさせたかと思えば、彼を夫の弱みにつけこんで印刷所に雇い入れる。また、自分の妻だという白人女性アナベルを家に引き入れ、そのうちに大量の仕事を受注してきた上、大勢の外国人労働者やホームレスを「アナベルの親戚だから」「友達だから」と連れて来る。その結果、最後に出現するのは主客の区別のない祝祭的空間だ（写真）。

そして祭りの後、闖入者たちは瞬く間に姿を消し、散らかった部屋のみが残される。一家を覆っていた保護膜が全て剥ぎ取られ、平穏の下に潜んでいた継ぎ目がすっかりむきだしにされてしまった時、夫婦は粘土を平らにならすようにして継ぎ目を埋めながら日常に戻ることを選ぶ。逃げてしまった飼いの鳥も、同じ色を買ってしまうのだろうか。鳥だったことなどすぐに忘れられてしまうのだろうか。

一方、不法滞在の外国人労働者や河原に暮らすホームレスの生活や人物像を描くことには禁欲的で、彼らの姿は全く正体のつかめない他者として提示される。ひとりひとりの個性を印象づけるようなシーンもなく、観客に感情移入を許さない。感情移入できる存在だから歓待しようというのではなく、むしろ不透明な計り知れない他者であるからこそ歓待せざるを得ないという現実が示されているとも受

け取れよう。たとえその他者の出現によって、自分たちの恥部が晒されることになろうとも。

山王団地への『サウダーヂ』

空族の富田克也監督による『サウダーヂ』（二〇一一）では、雇用機会そのものが限られた地方都市で、建設現場で働く男ふたりの生活と外国人労働者との関わりをめぐって物語が展開される。

リーマンショック後の甲府で、三〇代の精司はエステティシヤンの妻と二人で暮らしており、そろそろ子供が欲しいと言われているが気乗りせずにいる。タイ人ホステスのもとに通い詰め、そこでだけ懐かしさを伴う解放感を覚えるが、かといって妻と別れてホステスと暮らそうという踏ん切りはつかない。しかし次第に現場は減り、社長は会社をたたむと告げる。上昇志向が強く、議員の支援活動にのめり込んでいる妻は、土木建築業にはもう未来がないからかえってラッキーだったかも、と精司の神経を逆撫でする。

一方、精司と同じ現場に派遣されたラッパーのUFOLKは、年配の作業員がパチンコの話しかしないことに軽蔑の念を覚え、若手の作業員仲間に思わず熱くパチンコの弊害を語り「北鮮が」と口走る。しかし他の作業員は「ホクセンって何」と聞き返すも、さして興味もなさそうに次の話

題へと移ってしまう。やがて、実は彼の両親はパチンコで多額の借金を負っており、それでもなおやめられずに息子の目を盗んでパチンコ屋に通っていることが明らかになる。彼は排外主義的なラップに愛国心を託すが、いくらライブが盛りあがっても詞の意味を理解している客がいないことに業を煮やす。

精司がタイ人女性に入れあげて現実から逃れようとするのと同様に、「FON」は日々の鬱屈を日系ブラジル人への憎悪へと転嫁する。彼が幼い頃に暮らしていた山王団地は住民の多くがブラジル人となり、かつて彼に尽くしてくれた女友達が仕切るイベントでは、対バンのブラジル人グループに惨敗を喫する。おまけにその女友達はブラジル人と付き合っているらしい。こうした事情が重なって、彼は一人で憎悪をつのらせ、ついにはヒップホップグループのブラジル人を刺してしまう。

憎しみではなく愛情からの関係であったはずの精司とタイ人ホステスも、結局は破局を迎える。妻と別れることを決めてタイ人女性のもとに向かい、一緒にタイで暮らそうと持ちかけるも、女は彼のタイへの幻想を看破し、「I want money」と言い捨てて去る。

憎悪と愛情という相反する感情を外国人に向けるふたりだが、いずれも自分と家族の生活に生じたひずみを外国人を利用して解消しようとしていることに変わりはない。デ

トックス効果を謳う「日輪水」なるミネラルウォーターのCMが劇中で反復されるのは、誰もが他者を利用して自分の内側に溜まった澱を排出しようとしていることを暗示しているかのようだ。

外国語を学ぶだけではまだ足りない——『BAD FILM』

続いて、二〇一二年に発表されたのが日本人と中国人の対立を描く園子温監督作品『BAD FILM』である。高円寺をはじめ渋谷、新宿といった都内各地を舞台に、東京ガガのメンバーにより一九九五年に撮影されるも、未完成のままになっていたのが一七年の歳月を経て編集、公開された。

一九九七年の香港返還前夜という近未来を背景に設定して撮影された本作では、中央線沿線地域はスラム化しており、特に中国人の多い高円寺では日本人による自警団「神風」が結成され、中国人を高円寺からひとり残らず叩き出すと宣言されるさまが描かれる。頻発する中国人襲撃事件に対抗して中国人も自警団「白虎幫」を結成、抗争が激化する。「神風」のメンバーが地下鉄で黒人男性と一緒にいる日本人女性に「日本という国の将来についてきちんと考えたことはあるのか」と絡み、街宣車を走らせて「高円寺から中国人を排斥し美しい国家を取り戻しましょう」と叫ぶシーンは、『サウダーヂ』のDFOCKを極端に戯画化し

たかのようにであると同時に、『歓待』で描かれる町内会の善意の人々に潜む意識を晒すかのようでもある。

しかし、日本人と中国人の敵対構造は、別の対立軸が持ち込まれることにより内側から瓦解してゆく。「神風」のボスは強烈なホモフォビアの持ち主で、ゲイである配下は自分の性的指向を隠している。その一方で、「神風」の幹部の妹は「白虎幫」側の中国人少女と恋仲になり、一時的に両チームに和解をもたす。さらに、レズビアンのコネクションを通して銃器を安く手に入れられることから、同性愛者たちがチームを越えて密かに通じ合ったことを発端に、合同で香港返還を祝う席で両チームのボスを殺害する。その結果、「神風」は中国人排斥からゲイとレズビアンの共存共栄を目指して方向転換することが告げられる。「民族」を切断線にすれば「日本人」「中国人」という断面が生まれるが、性的指向で切断すればまた別の断面が生まれる。ある分類に従えば截然と区切られるグループが、別の分類基準では混合し、さらに別の基準ではまた異なる分類が為されることになる。境界そのものを攪乱するというより、全く異なる基準を持ち込むことによって既存の二項対立を無意味なものに変えることが試みられているといえるべきかもしれない。

とはいっても、両チームは決してそこで真の和解には至らない。ここで大きな役割を果たすのが双方の通訳であ

る。『歓待』『サウダーヂ』にも思うように言葉が通じない状況が描かれていたが、『BAD FILM』では多言語状況がいつそう推し進められており、「神風」と「白虎幫」のメンバーは大半が自分たちのことばしか理解しない。そこで、相手に言いがかりをつけるにも交渉するにも通訳の存在が欠かせないことになる。しかし両チームをつなぐパイプ役となつてしかるべき二人の通訳が、実はもつとも激しく対立を望んでいるのだ。コインランドリーで通訳どうしが会話する場面で、「神風」の日本人通訳は「お前たち漢民族を憎んでる」「じゃあ帰つたら？ そんなご大層な国なら。何で日本に来たのかね」と吐き捨てる。「白虎幫」の中国人通訳は「いい質問だね」と受け流し、「中国人は日本も中国だと思つてんだなあ」と言つて立ち去る。この二人は、対立を煽るという点では意見が一致し、恋人どうしである日本と中国の少女が互いに相手チームによつて殺され死体を送りつけられたように偽装する。

互いのことばを学ぶことは相手を理解することにつながる、と外国語教育の場ではよく口にされるが、この映画では相手のことばを全く解さない少女たちが固い愛情で結ばれる一方、互いの言語に精通した通訳が憎悪を煽るという点で痛烈な皮肉になつているとも受けとめられる。

右に挙げた三本の映画はいずれも、相手を理解すれば憎

悪は消えるとして異文化学習や外国人との交流を勧めることを主眼とするような作品ではない。むしろ、理解できる相手だから仲間として見なすとか、理解できない他者であれば排除の対象になるといった前提そのものを覆す作品であるというべきかもしれない。理解できようがダメだが、他者は自分の生活圏内に存在しており、さらには自分も見方を変えれば他者として切り捨てられる対象にならないとも限らない。そういった不透明な社会の様相が反映されているといえるだろう。

映画リスト

『BAD FILM』……①BAD FILM ②園子温、③二〇一二年、④日本、⑤日本語、中国語、広東語、⑥カナザワ映画祭 2012XXX (二〇一二年)、DVD販売(園子温監督初期作品集 DVD-BOX)所収)。

『歓待』……①歓待／hospitale ②深田晃司、③二〇一〇年、④日本、⑤日本語、英語、⑥劇場公開(二〇一一年)、DVD販売。

『サウダーヂ』……①サウダーヂ、②富田克也、③二〇一一年、④日本、⑤日本語、タイ語、ポルトガル語、⑥劇場公開(二〇一一年)。

著者紹介

一二五頁に掲載。